

交通 評論



富士山頂は火口を囲んでいくつかのピークを持つ丘が連なっている。その中で一番高い剣ヶ峰に富士山測候所がへばりつくように建っている。

東に下ると浅間大社があるが、そのさきの東安河原に旧佐藤小屋という岩室があった。1930年(昭和5年)に佐藤順一が篤志家の援助で建て、初めて厳冬の気象観測に成功した小屋で、それを元に、1932年には第2極年観測を行い、引き続き、富士山測候所の有人通年観測が72年間続けられたという由緒ある建物であったが、測候所が

剣ヶ峰に移設されて以来ほとんど使用されず、今年取り壊された。富士山測候所の成立における佐藤順一の仕事は、越冬観測の先駆者・野中到、千代子夫妻の壮絶な秋冬観測に比べて地味なものであるが、それまで不可能だと信じられていた「常識」を覆すもので観測史上意味深い。

佐藤小屋

土器屋 由紀子

1931年、定年間の佐藤順一が故山階宮(やましののみや)との約束を果たすべく、強力(ごうりき)の梶房吉と2人で1ヶ月の厳冬の観測を成功させたことよって、富士山の気象観測が公式に認められた。

凍傷で足の指を失いながらも観測を成功させた彼の夢はその後72年間の有人観測に引き継がれ、1964年には富士山レーダー建設で、台風の害(とりで)として、台風の被害から多くを国民を守り、日本の気象事業の歴史に輝かしいページを残した。しかし、気象衛星の発達で富士山レーダーが更新されず2004年(平成16年)に有人観測は終了した。

今年、1932年の富士山測候所開所から80年目を迎えるが、無人化された測候所はその後、筆者の属する「NPO法人富士山測候所」をつくり出す羽目になってしまったのである。最近では「富士山頂でNPOが何かやっているらしい」ということが知られるようになり、ウィキペディアで「富士山測候所」と引くと、最後に当NPO法人の夏期管理が記載されている。研究成果は世界的な論文誌にも載るようになった。

しかしながら、公的援助がないため、公募による研究資金に頼って運営している現状は決して楽ではない。夏でも氷点下になるような極地の気象条件の中で、安全に管理するために、2カ月の開所でも年間3000万円の資金が必要である。

そもそも、富士山頂という国立公園で特別名勝、日汚染などの観測研究を継続するのはどう考えても国家事業である。公募による研究資金頼みの小さいNPOには荷が重すぎるが、走り出したら止まれない、応募書類を書きながらの自転車操作を続けているが資金が尽きたといっても、簡単に放り出せないところに来ていたように感じている。

今後「越境大気汚染の害として」測候所を維持し、開かれた新しい研究施設として維持し続けたいという私たちの夢は今後どう引き受けていただけるのだろうか。9月初め6年目の夏期観測を無事終了して山頂を撤収したが、さっぱりしてしまった佐藤小屋跡をながめながら今後の思案をしている。(江戸川大学名誉教授)

測候所が凍傷で足の指を失いながらも観測を成功させた彼の

測候所はその後、筆者の属する「NPO法人富士山測候所」をつくり出す羽目になってしまったのである。

測候所はその後、筆者の属する「NPO法人富士山測候所」をつくり出す羽目になってしまったのである。